

本来なら同行者はシユラだったから彼女以外はツインルームになるはずだった、湯ノ川代理となつて講師で集め、一つをトリプルにしてシングルをキャンセルなんて面倒なので部屋割りは変えなかつた。それに普段一緒に住んでいるわけだし、こういつた任務でも扱いは変わらないんだから気にしなくて良いのに。何だか燐は四国に着いてからおかしい。

「雪男、お前平気か？」

「兄さんこそ」何だよ唐突に。

「……」

燐は雪男をじつと見ると何にもないなら良いけど、こういうの初めてだし、と言いくそうに続けた。俯きがちな顔が赤らんでいるようにも見えてその熱っぽさがこちらにも移る。

「何言つてんのさ、しっかりしてよ」

緯度わずか五度の移動旅行は燐をすっかり豹変させてしまつたらしい、昨夜に教えたつもりなのに日本語が通じるところか違う場所という認識は、きつと喜ぶとか楽しむとかそういうのを超えてしまつたのだろう。目にする景観、感じる空気に匂い、耳にする言葉、中心部の造りまで明らかに違つて新鮮に映つた。燐が大人しいのはそういうわけだ、早い話が経験が少なすぎて積載オーバー、アウエー感を持て余すなんてしえみの方が余程度胸がある、かわいげがありすぎてこつちが沸きそう。そんな燐の姿はもはや詐欺めいていて雪男にはつらい、いつそあんぐりするほど緯度と緯度を越えた場所の方が落ち着くんじゃないのか。

「……なんか、お前の方が危ねえ気がする」

「は？」

燐は自信がないのか、怒られることを覚悟という顔をしている。翻つ

てイラつとした。

「僕を見くびつてる？」

短くてきつぱりとした、ない、の返事、俺が言つたつてお前信じなさそうだし、力使うとか怒りそうだしよ、とぼそぼそと言つて雪男から視線をそらす。

「ここ着いてから視られてる。よくわかんねーのがへばりついている気がする」

「百々目鬼にでもストーキングされたらそうかもね」

腕を組んで燐を見返す。

「変な夢見るし」

今朝の覚えてもない夢に一体何の力があるというんだか。

「……珍しいね、兄さんがナーバスになつてるなんて」

「オレは真面目だ、ホクROMEガネ」茶化すな。

雪男は少し黙つてから、兄さん、と燐を呼んでより近寄らせる。

「ん？」

「なんかついている」

え、どこだ？と素直に問うてくる燐の前髪を掻き上げ、額に唇を落とす。

「お守りにもならないけど」

「……」

反応は鈍いというか、動じるところもない。燐は離されるときつと前髪を直し、怒つているのか無言でぐいと雪男のコートを引つ張つた。

「兄さん？」

「黙れ」

襟を引き寄せてゆつくりと唇を合わせてくる。ちよつとした甘えなのか、どうなのかわからないけれど求めに応じるのは不本意どころか

喜んでというところだ。口腔内にやわらかな熱がはいりこんできたかと思うと、そろそろと探つてすぐに離れてしまう。目元がちよつと色つぽかったのに、腰を抱く隙もない。と、惜しみかけたところへ――

「……!!」

がぶりと首筋に噛みつかれ、強く吸われた。

犬歯が肌に食い込み、湿つた吐息に、小さな熱を持つ。

「こういうのがお守りだ」

あ、はい。

してやったりな笑顔を作るでもなく、燐は雪男をその場に残し、何事も無かつたような顔ですたすたと行つてしまふ。さわりと風が吹いて目の前をすうと麴麴コルケルが過ぎて行つた。

「……え？」

今になって首どころか、身体全体に痛みに似た衝撃が走る。つて、待て待て、見える位置じゃないかこれ？ 歯形かキスマークが残るんじゃないか？

なんだか力が抜けそうだな。

――ふふ。

「!!」

若い娘の笑い声がして、雪男ははつと我に返る。見られた？ 玄關など周りにひとはいなかったが、丁度目の前の駐車場にタクシーが入つてくるのが見えた。慌てて襟を引き上げ、痕を隠す。タクシーからは腕に包帯を巻いたシユラと湯ノ川が降りてきた。

「流石に四針はマズイでしょ」

湯ノ川は後頭部を掻きながら言う。横のシユラは怪我をして前線撤

退のくせに偉そうだな。

「事故だよ、事故。へまじゃない」

「大人しく引率お願いしますよ」

雪男は荷物を手に突つた目つきでシユラを振り返り、ぽかんとしている生徒達を見た。

「すみません。そんなわけが霧隠先生と交代することになったので、僕は討伐隊に加わりませんが、皆さんは予定通りに任務を遂行し、演習に備えて下さい」

すたすたと待たせてある車に乗り込んでいく。観光に回つた車はそのまま雪男の送迎車となり、淡路島に向かうという。渦潮、と勝呂が呟いていた、蛟が出てもおかしな。

「そうなのか？」

「もともと月の引力と潮流で起こる現象なんや、潮がぶつかり合うた場所に出たとして不思議やない」地形も深いしな。

「……」

「おい、燐。こっち集中しろ！」

駐車場を見ようとしてシユラに叱咤される。どんなドジを踏んだのか知らないが、包帯以外シユラは普通に見える。

「これから任務地に移動。準備したら弁当で食事、日没は十七時二十分、任務開始まで移動を含めて一時間半だから素早く済ませるように」

宿の用意してくれたバスが途中のターミナルまで燐達と弁当を運んでくれることになり、二十人乗りのマイクロボバスに悠々とばらけて座つて宿を出発した。カーブが多く道はすぐに狭くなり、覆い被さるように梢が頭上を覆うようになった。吉野川の支流とやらはべつたりとした黒で、潮つてどこだと言いたくなるような風景に燐はク口を連れてくれば良かったと思ひながら窓の外を見ていた。西の空は茜に染まり、

黒い山並みが見える、見学地は平坦で、畑もあってひと眠りの間の距離にこんな山になり、そうして川を辿れば海になる、なんというか、土地の高低差といいますが、凝縮されている。

「帰りは徒歩だからにやー、体力残しとけよー」

勝呂や出雲の短いそれとは違う返事ともつかない声がかかる、志摩だ。バスはすぐにターミナルに着き、志摩が虫だの何だのと言っているうちに目的地に着いた。十分ほどしか歩いていない、明かり明かり、煙、煙と本陣テント設営というより、熱心に虫除け対策を行う志摩の足下で秋の虫が集まっている声が聞こえている。

「はー、結構近いんだな……」

燐は宝とで荷物運びと火熾しの担当だ、しえみと出雲が移動可能な簡易の魔法円を置いているなかで勝呂たちがテントを張っていた。

「地元の人気心霊スポットなんだよ」

「……」

独り言のつもりだったのに人形にすらつと返されて思わず唾を飲み込む。

「腹話術、オマエってイイや……」

「とつとと火熾しやがれ」

闇に沈んだ旅館はなるほど古かった、和洋折衷といった造りで、入り口の屋根瓦には雑草が生え、立ち入り禁止の看板は斜めになって、石畳の横から生えた草はどこどころが踏み倒されていた。藁の枝は方々に生え、竹垣は壊れ、玉砂利は均一にもなっていない。手入れをすればまだまだ十分旅館として機能しそうなのに、放置された住びしさがヒビの入ったガラス障子や、破れた障子紙に見て取れた。手すりに浮いた錆が動いているようにも見える。

「でもよー、他にも旅館とか飯屋とかあっただろ、なんでそんな賑や

かそうなのになんなんつちゃうんだ？」

「噂がそうしたんだろ」

腹話術は話せば話すようになっていた。それでも一定の距離を置き、自ら口を開かないし、口調は難に突き放すようではあるけれど、燐のことをサタンの仔と判っているのだろうが、怖がったり避けたりしないところが実は前から不思議だった。

「設営完了だな、はい、メシー」

というシユラの掛け声のもと、火の周りに円座に座り、回ってきた弁当を広げる。しかし任務の説明は湯ノ川だ。

「魍魎の巣窟、心霊スポットたらしめた屍は野生動物の死骸です、うろろしているのが相応の対処を。恐らく鬼族の悪魔もいると思われま。最近には幽霊が一体、中年の男性の姿で目撃されています。聖水はそれぞれ携帯し、連絡を怠らないように。班分けは三班、全員で追うわけにもいかなので大雑把に割り振るよ、霧隠先生はテント、俺も行くから」

班分けはしえみと勝呂、宝の三人が、志摩と出雲に湯ノ川、最後は燐と子猫丸となった。

「と、奥村が無茶やつたら聖水ぶっかけていいそうです」

「ええっ!?」何で？」

能力に応じた分け方に文句はない、だが二人だからって無茶なんてしない。というか、信用なさ過ぎる。勝呂が諦める、しやーないわとぼんと慰めなのかよくわからない言葉とともに肩を叩く。怨みがましく向けた視線にシユラが煩がるように手を振った。

「雪男が置いてったんだよ、アタシらはそれに従ってるだけ。燐と三輪はアタシと玄関から一階部分とテント付近な」

「雪男……」あの野郎。